様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５６０７８０

研究課題名（和文）西洋建築史学の現代性に関する基盤的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on Contemporariness of History of Western Architecture

研究代表者
加藤　耕一（Kato, Koichi）

東京大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：３０３４９８３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、近代以降に成立した「西洋建築史学」という学問が、同時代の建築理論、建築デザインと密接な関係性を有しており、西洋建築史研究が同時代の建築理論へと影響を与えたと同時に、同時代の建築デザインの方向性が建築史研究の方法論へと影響を与えてきたことを明らかにした。そこでの重要な研究成果のひとつとしてH.F.マルグレイヴ著『近代建築理論全史』の翻訳を行い、出版準備中である。
さらに、21世紀の現代における西洋建築史学に求められる方法論についても検討し、「構築と再利用の観点による西洋建築史学の再構築のための基礎研究」という新たな研究課題を提示した。

研究成果の概要（英文）：This study showed that the region of research: "History of Western Architecture" began in the Modern Ages, and that always has a strong relationship with the contemporary Architectural Theory and Architectural Design. One of the important result of this study is a translation of a book, H. F. Mallgrave, Modern Architectural Theory, Cambridge University press 2005, and the translation will be published in 2015.
In this research, we have also studied on the new methodology for the History of Western Architecture in the 21st century, and found a new research subject: "Basic Research for the Reconstruction of the History of Western Architecture in terms of Tectonic and Re-use".

研究分野：西洋建築史

キーワード：西洋建築史　建築理論　近代建築

１．研究開始当初の背景

我が国の西洋建築史学は、2000 年頃を境に、衰退の途をたどっている。日本建築学会の大会での発表件数を調べたところ、歴史／意匠分野全体の発表件数は増加しているにもかかわらず、西洋建築史分野の発表件数は減少傾向にあった。かつて、西洋建築史学は建築学の教育・研究の両面における重要な分野であった。しかし現在、国内のいくつかの大学では建築史の講座が閉鎖されつつあり、実学指向の社会の中でその存在意義を失いかけている。こうした傾向に歯止めをかけ、西洋建築史学の現代的な意義を見出したい。

２．研究の目的

欧米において、建築史の研究者がしばしば建築史学と建築理論とを並行して研究対象とすることがあるが、そこには「過去を対象とする建築史学」と「現代を対象とする建築理論」という構図があった。それに対して本研究は、建築史学と理論とを過去と現在に分けるのではなく、両者の関係性を歴史的に遡って検証することで、建築史と建築理論の同時代性を明らかにするものである。すなわち、理論と歴史の両面における並行的な歴史的変遷を明らかにすることを目的とする。さらにその結果として、21 世紀における西洋建築史学の意義、またそのための方法論を見出すことを目的とする。

３．研究の方法

「近現代建築理論研究会」と「西洋建築史学の方法論に関する研究会」の２つの研究会を軸として、主として 19 世紀から 20 世紀にかけての建築史研究と建築理論との関係性を検証するとともに、西洋建築史学の新たな方法論の可能性を探った。研究成果を随時 HP で公開し、研究会をオープンにすることで、同じ問題意識をもつ研究者との議論を活性化させる。

このような網羅的研究と平行して、研究代表者自身の専門性を生かした、主として中世建築を対象とする事例研究を進める。これは網羅的研究によって見出された新たな方法論の有効性を実証するものである。

４．研究成果

本研究課題では、近代以降に成立した「西洋建築史学」という学問が、同時代の建築理論、建築デザインと密接な関係性を有しており、西洋建築史研究が同時代の建築理論へと影響を与えてきたと同時に、同時代の建築デザインの方向性が建築史研究の方法論へと影響を与えてきた、という相互関係を明らかにした。とくに「近現代建築理論研究会」で主要参考文献として用いてきた H.F.マルグレイヴ著『近代建築理論全史』の翻訳を行い、重要な研究成果のひとつとして現在、出版準備中である。

また 2014 年 11 月 29 日には本研究成果の総括となるシンポジウム「時間のなかの建築：リノベーション時代の西洋建築史」を開催した。本シンポジウムが本研究課題のもっとも重要な研究成果となっている。

（本シンポジウムの成果をまとめた資料は、http://www.history.arch.t.u-tokyo.ac.jp/kato/Professor_files/proceedings_architectureintime.pdf　よりダウンロード可能）

（シンポジウム登壇者は以下の通り）

- 加藤耕一　「時間のなかの建築――再利用から生じる歴史の重層性」
- 伊藤喜彦　「再利用による創造、増改築による保全：コルドバ大モスク（786-1523）」
- 岡北一孝　「アルベルティの建築創作における「創造的修整」」
- 中島智章　「フランスの各王朝の永続性重視の考え方と建築保存」
- 松本　裕　「「オスマニザシオン」:「都市組織」の再編と重層化――パリ市第 II 区の変遷を中心に」
- 黒田泰介　「スポリアと再利用――都市組織の中に生き続ける建築」

また、本シンポジウムで研究代表者が明らかにしたポイントは以下の通りである。

①終わりゆく近代

人口増加、都市の拡大・成長、郊外の誕生、住宅不足・住宅の大量供給ということが建築における重要なテーマであった近代（とくに 20 世紀）と比較したとき、現在の我々が直面しているのは、人口減少、少子高齢化、都市の縮小、郊外・地方都市の空洞化、住宅供給過多・空き家問題といった近代とはまったく逆のベクトルを持つ問題であり、すなわち我々はいま「終わりゆく近代」に直面しているといえる。このなかでひとつ特徴的な建築の現象が「リノベーション」（既存ストックの再利用）である。

②再開発／保存／再利用について

既存建築に対する 3 つの態度として、〈再開発〉〈保存〉〈再利用〉をあげ、それぞれの歴史的経緯を整理した。

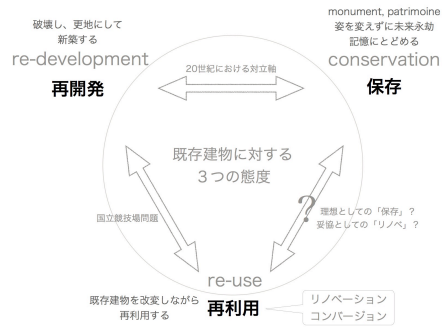

図１：既存建築に対する３つの態度

既存ストックの再利用という現象は、歴史的建築に対する態度という問題に直結する。しかし歴史的観点に立つと、〈建築の保存〉と〈建築の再利用〉とはまったく異なる建築観に基づくものであることが明らかになった。

そもそも〈建築の保存〉は 19 世紀のヨーロッパで誕生した〈文化財〉という価値観と結びついたものである。そして文化財という価値付けによる〈建築の保存〉手法は、〈再開発〉によって歴史的建築が危機に瀕している際に、きわめて有効に働いてきた。すなわち〈建築の保存〉は、古い建築を破壊し、新築するという〈再開発〉に対するアンチテーゼとして誕生したものである。

ところでそのような〈再開発〉、とくに都市的なスケールでの〈再開発〉が歴史上頻繁に行われるようになるのは 16-17 世紀のヨーロッパにおいてである。これまでの西洋建築史学でも「バロック的都市計画」などと呼ばれ、よく知られていたことであるが、これらはまさに〈再開発〉の始まりであった。

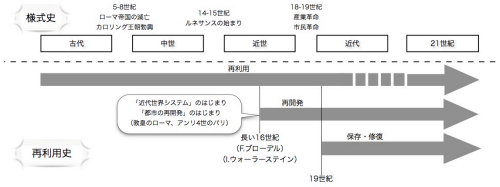

図２：歴史のなかで見た「３つの態度」

すなわち、20 世紀にしばしば対立軸として示されてきた〈保存〉vs.〈再開発〉という対立軸は、一方は 19 世紀に、もう一方は 16 世紀に起源を持つものであり、そのような異なる歴史性を有する価値観の対立であった。それに対して、近年の建築界で盛んに取りあげられるようになったトピックである既存ストックの〈再利用〉、リノベーションはどうかと考えてみると、じつは既存建築の再利用は西洋建築の歴史のなかで、遙か以前から繰り返されてきた建築行為であることが見えてきた。〈再利用〉は、もっとも歴史が古く、なおかつ本質的な建築行為である可能性がある。

③〈点の建築史〉から〈線の建築史〉へ

しかしながら、これまでの「西洋建築史学」では、建築が再利用によってさまざまな時間変化を遂げてきたことについて、ほとんど紹介されることはなかった。教科書的な建築史学において、歴史的な建築は竣工時によって編年的に並べられた年代カタログとして整理されてきた。それは現代の建築雑誌が、編年的に新建築を紹介し年代カタログを作っていることと、強い類似を示しており、まさに両者は同時代の建築観によって整理されてきた考え方である。

こうした年代カタログの建築史は時間のなかのある一瞬、竣工時点だけに注目した建築観であり、〈点の建築史〉と呼ぶべきものである。こうした観点で改めて西洋建築史で取りあげられる歴史的建築を概観すると、多くの建築が少なからぬ時間変化を遂げており、じつは〈点の建築史〉で紹介される建築の「竣工年代」は、実際には竣工年代ですらなく、既存建築が大幅に改築された年代であったり、既存建築への増築であったりすることもしばしばである。しかし、そうした建築の時間変化には一切触れずに、あたかもすべての歴史上の建築が、近代の建築と同じように「建築家」による「作品」であるかのように論じてきたのが〈点の建築史〉であった。

それに対し、歴史上の建築を〈線の建築史〉の観点で、すなわち建築の〈再利用〉の観点から論じ、建築の時間変化を明らかにすることは、新たな建築史学の方法論となりうるだろう。

シンポジウムで議論を深めた建築の〈再利用〉とは別の観点で、もうひとつ重要な方法論として浮かび上がってきたのが、構築術的な観点から建築史学にアプローチする方法論である。

④構築術的建築史学

現在の西洋建築史学の原点は、19 世紀末から 20 世紀初頭のウィーン学派にあるといえる。そしてウィーン学派は「フォルムの学」と呼ばれる方法論で建築史学を築きあげた。フォルムによって歴史的な建築様式を定義し、フォルムによって建築デザインを論じる方法は、20 世紀においてはきわめて有効だったといえる。

しかしながら、近年の建築史学では抽象的な形態／形式（フォルム）で建築を論じるのではなく、構法や素材といった具体的なモノそのものに着目した研究が増えてきている。このことは、現代の建築設計におけるデザインと構造の融合と深く関係する一方で、歴史的にはモダニズムと同時代のウィーン学派よりも前の建築理論において重要な役割を果たしたゴットフリート・ゼンパーのテクトニック（構築術の観点）と被覆の法則（マテリアリティの観点）とのつながりが指摘できそうである。すなわちケネス・フランプトン『テクトニック・カルチャー』以降の建築史学の新傾向と見ることができるだろう。

これについては 2012 年に出版した『ゴシック様式成立史論』（中央公論美術出版）の序文として「構築術的空間論としてのゴシック建築研究」をまとめた。これは 19 世紀から 20 世紀にかけてヨーロッパで展開されてきたゴシック建築研究が、いかに同時代の建築理論と同時代性を有していたかということを論じた研究であると同時に、それに対して研究代表者のゴシック建築研究が「構築術的」観点によって、新しい建築史研究の方法論に基づくものであることを論じたもので

ある。

抽象的な形式（フォルム）の問題ではなく、構築術に着目し、実際の建築物そのものに着目するという観点は、建築の〈再利用〉を論じる際にもきわめて重要かつ有効な方法である。構築に着目することと再利用に着目することは、密接に関係した新しい建築史学の方法論となりうるであろう。

こうした観点から、本研究課題から明らかになった西洋建築史学の新たな方法論を用いた研究課題として、「構築と再利用の観点による西洋建築史学の再構築のための基礎研究」という課題を提示し、今後はこの研究課題に沿って研究を継続していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
加藤耕一「歴史観なき現代建築に未来はない」(GA JAPAN, vol. 124, 2013年9月1日、pp. 93-98)

〔学会発表〕（計　６件）
加藤耕一「「時間のなかの建築――再利用から生じる歴史の重層性」（シンポジウム：時間のなかの建築、2014 年 11 月 29 日、東京大学)
加藤耕一「 モノリスの細円柱とゴシック建築の誕生」«La naissance de l'architecture gothique et la colonnette en délit»（シンポジウム：中世における〈建築〉、日本とヨーロッパ、2014 年 11 月 15-16 日）
Koichi KATO, "Transformation morphologique du tissu urbain de Capestang du XIIe au XIVe siècle: Une analyse hypothétique d'une église et un îlot", Histoire de territoires dans le Languedoc médiéval et modern, （ラウンドテーブル：中近世フランス・ラングドックの領域史、東京日仏会館、2014 年 10 月 11-12 日）
Koichi KATO, "City Walls of Paris and the History of Urban Construction: A Contrast between Middle Ages and Modern Ages", （シンポジウム：空間・身分・制度：日仏都市史のパースペクティヴ、パリ第 4（ソルボンヌ）大学、2013 年 11 月 22-23 日）
加藤耕一、「 西洋建築史学の同時代性――ゴシック建築研究の方法論に関する一考察」（「中世建築研究会」、早稲田大学 大隈タワー302 室、2013 年 11 月 2 日）
Koichi KATO, "Stone Quarries and the Construction in Medieval France"（シンポジウム：Space, Culture, and Regeneration of Cities in History: From the Viewpoint of International Comparison of Territory and Infrastructure、東京大学、2012 年 12 月 304 日）

〔図書〕（計　２件）
加藤耕一『ゴシック様式成立史論』中央公論美術出版、2012 年
H.F.マルグレイヴ著、加藤耕一監訳『近代建築理論全史』丸善出版、2015 年出版予定

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.history.arch.t.u-tokyo.ac.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
加藤耕一（KATO, Koichi）
東京大学・大学院工学系研究科・准教授
研究者番号：30349831

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：